

# 生きる人見つめる



## 坪田譲治文学賞受賞の佐川さん

「悪人」「悪質」「悪の教典」と、「悪」を冠した作品が幅をきかせる昨今の小説界。だが、坪田譲治文学賞の今年の受賞作は「おれのおばさん」(集英社)。至ってのどかなタイトルの作品に託した思いを、著者の佐川光晴さんに聞いた。

受賞作は、父の逮捕が原因でエリート校を中退した中学生が主人公。失意の中、母の姉である「おばさん」が切り盛りする児童養護施設に身を寄せ、少し成長の階段を上る。けなげな青春小説だ。

「世の中が悪だと大人は汚いとか、そういうふうには書きたくなかつた」と佐川さんは言う。「子どもの幼児的な残虐さとか、心のネガティブな部分をじとじと切り取る小説も多いけれど、自分がそういう話を書



受賞作「おれのおばさん」

享月

二

美術

軽い嘘ついて抱いてる悔いひとつ  
寂しいな抱いた夢も消えそうよ  
流れ星小さな願い胸に抱く

(美) 暁藤本  
令子

雪かきの人らに早く届けんと保存食を運ぶ蒜山への道

岡山花房 富恵

原金森 順

庭家原

（真）

岡山版で毎週水曜日に掲載し

てある。毎朝10分の「朗読の時

間」を設けて読書に親しみ、

全校で同じ本を読む取り組み

で、年に数回実施している。

個人賞の部門でも、短歌や

川柳、読書体験記部門に6人

が入賞した。指導する斎藤恵

子先生は、土井聰翠にちなん

だ。聰翠賞を受賞した詩人で

もある。学校全体での取り組

みを評価してもらえたことが

うれしい。生徒たちの表現す

る力が伸びてしてきた

い」と話している。(柏崎歛)

トートバッグに

真庭市の蒜山地域に古くか

ら伝わるガマ細工のトートバ

グをつくる「古

Nでづくりプロ

お披露目会が28日

山高原であつた

ガマ細工は6

あるとされ、当

手提げかご」雪観

の民貢が作られ

て丈夫なのが特

山地域で自生す

ており、栽培もさ

蒜山ガマ細工生

ヒルゼン高原セ

して、デザイン企

20代後半から40代

一ゲットとしたバ

完成した。来年以

に向けた取り組み

という。ヒルゼン

の石賀幹浩専務

新たな魅力を発信

話している。

(一)

## 岡山学芸館高が受賞

読書や文化活動に貢献した学校に贈られる「第3回田辯市東区」が選ばれた。学校賞聖子文学館ジュニア文学賞、学校賞(文字・活字文化推進)中国地方では唯一の受賞。

岡山学芸館高は国語の授業に、短歌や俳句、川柳づくりを探り入れている。朝日新聞岡山版で毎週水曜日に掲載している歌壇や俳壇で、毎週のように生徒の作品が入選している。毎朝10分の「朗読の時間」を設けて読書に親しみ、全校で同じ本を読む取り組み

も、年に数回実施している。個人賞の部門でも、短歌や川柳、読書体験記部門に6人が入賞した。指導する斎藤恵子先生は、土井聰翠にちなんだ「聰翠賞」を受賞した詩人である。学校全体での取り組みを評価してもらえたことがうれしい。生徒たちの表現す

## 真庭のガマ細工トートバッグに

真庭市の蒜山地域に古くから伝わるガマ細工のトートバッグに

ない

受賞作のストーリーは、自身の経験を投影した部分が多い。

十代の頃、親の鬱病が原因で家の経済状況が悪化し、寮がある国立大学に進まるを得なかつた。「おばさん」を始め、登場人物の多くは、大学で出会った友人たちがモデルだという。

姉御肌の豪快な性格ながら、内面にさまざまな葛藤を抱えて生きる「おばさん」との交流を

う姿を、ひたすら温かい視線で追つた。「自分の関心のあることを地道に追いかけただけ」というが、話題性や刺激が先行するような作品への違和感が、言葉の端々ににじむ。「そういう

ものには、いつかまひが来る。いま本が売れていないのは、それをやりすぎた面もあるんじや

通して、主人公の少年は、大人も子どもと同じように悩みながら生きているんだと悟る。「子

どもから見た大人を、ずるくて無責任な存在ではなく、子どもに劣らず苦しんでいる存在として描きたかった」

選考委員の一人で文芸評論家

キバナカイウ 元・西本真理子